

文 雑 考

——国語教育への展望とともに——

湊 吉 正

バイイ (Ch. Bally) は、『一般言語学とフランス言語学』⁽¹⁾の中で、文を次のように定義している。

文は、思想の伝達の可能なかぎり単純な形式である。

そしてさらに、そこにおける「思想」(pensée)が、人間の知・情・意の心的活動の全般に同時に関係し、その主体の能動的参加を伴うような、生きた思想である点を強調している。

そのような動的な生きた思想は、主体的行為として、常に形式的なものであり、表現的なものである。このように、思想を主体的行為としてみる立場に立つならば、思想はまず、表現として把握されることになる。

一方、思想を、人間関係の場の中での社会的事象とみる立場に立つこともできる。この立場に立つならば、思想はまず、伝達として把握されることになる。

したがって、思想をめぐっての表現と伝達とは、主体の言語活動を通して相互媒介的關係、表裏の關係に立つものとして、相互に位置づけられることになるであろう。

バイイは、定義の中では、「思想の伝達」(la communication d'une pensée)ということ述べているが、実際にはむしろ、表現の機構に沿って文の分析を進めているとみられる。

バイイは、文を分析する上での基礎概念として「表象素」(dictum)と「陳述素」(modus)、「主題」(thème)と「述題」(propos)の二組の対概念を提示する。

まず、表象素と陳述素⁽²⁾については、次のように規定している。

外示文 (phrase explicite) は、二つの部分を含む。一つは、表象 (例、雨、治癒) を構成する過程との相関的要素である。これは、論理学者の範例にしたがって、「表象素」(dictum)と呼ぶことにしよう。他の一つは、文の中核的な部分、それなしでは文が存立しなくなるような部分を含む。すなわち、思考する主体の活動と相関的な、陳述 (modalité) の表現を含む。陳述は、その論理的、分析的表現として、陳述動詞 (例、信じる、喜ぶ、願う) とその主辞、すなわち陳述主辞とをもつ。これら二つは、表象素の補充的要素、すなわち「陳述素」(modus)を構成する。

次に、主題と述題⁽³⁾については、次のように規定している。

人が知らせたいと思う思想は、言表の目的、目標、人がもくろむもの、一言でいえば「述題」(propos)である。一方、人は、その基底、基体、動機を形造るもう一つのものについて言表する。そのもう一つのものが、「主題」(thème)である。

以上の表象素と陳述素、主題と述題について考察するに当たっては、言語活動主体の特に表現活動の過程を、分析的照合の基準として採用することが、適当であると判断される。

言語表現活動の過程については、第一に、主体の身体の内外に広がる生活世界の素材的な対象・事態との接触の段階、第二に、その接触に発する表現意図の発現の段階、第三に、その表現意図の主導のもとにおける言語記号の選択・結合の構成的操作の段階、第四に、その身体器官的表出による言語表現への到達の段階、以上のように段階づけることができよう。

第一の対象・事態との接触から、第四の言語表現への到達までの過程を貫通する心的活動の中核的作用を、言語作用として規定するならば、それをめぐって、第一の段階にかかわる対象・事態の領域、第一の段階から第四の段階までを貫く言語作用の領域、第四の段階にかかわる言語表現の領域が、それぞれ設定されることになる。

表象素と陳述素とは、先の言語表現の形態的秩序に属するものとして規定されていると解釈される。しかし同時に、それぞれにおいてその基盤をなす表象 (représentation) と陳述 (modalité) とは、表象が対象・事態の特徴の面を第一次的に反映し、陳述が主体の内的状況、その意図・態度の面を第一次的に反映しているとみられる点で、それらの間に差異はみとめられるけれども、それらがともに、主体の言語作用との密接な関係のもとに位置づけられる点は注目されるべきであろう。したがって、表象素と陳述素とは、先の言語作用の領域と言語表現の領域との連関の中で規定されることになる。

また、主題と述題については、主題が、先の第一段階における対象・事態に対応する特質を顕著に示すのに対し、述題が、第二段階における表現意図に対応する特質を顕著に示すという点で、それらの間に進行上の段階的差異がみとめられると同時に、それらの間の連続性もみとめられる。そこで、主題と述題とは、対象・事態の領域と言語作用の領域との連関の中で規定されることになる。

このように、パイイが文の分析を進めてゆく上で基礎概念として立てた二組の対概念には、主体の心的活動の過程、特にその中核をなす言語作用に深く統制された性格を、共通に見いだすことができる。すなわち、主題と述題においては、外から内への機能、素材的な対象・事態を内に繰り込んでゆく機能を通して、また表象素と陳述素においては、内から外への機能、言語表現を外へと形態的に構成してゆく機能を通して、そのような言語作用的性格を見いだすことができるのである。

文は、対象指示作用、主体表示作用、表現調整作用の三つの作用が統合されて、そこに一つの統合的な場として形成されたものである。文は、統合的単位として規定されるものであり、パイイが究極的に文を「形式」(forme)として規定したのは、そのような形式としての単位性を、そこに見いだしたからであろうと思われる。

そこで、対象指示作用は、生活世界のさまざまな対象・事態を指示する作用であり、対他性をもったものとして考えられる。主体表示作用は、主体の内的状況、その意図・態度を表示する作用であり、対自性をもったものとして考えられ、さらに、表現調整作用は、言語表現そのものを整えまとめる作用であり、即自性をもったものとして考えられる。

これら三領域における各作用と、バイイの主題と述題、表象素と陳述素の規定をめぐって立てられた三つの領域とを照合する場合、対象・事態の領域は、対象指示作用と直接対応するものとして把握され、主体の心的活動の中核たる言語作用の領域は、主体表示作用と直接対応するものとして把握され、さらに、言語表現の領域は、表現調整作用と直接対応するものとして把握される。

対象指示作用、主体表示作用、表現調整作用の三つの作用のそれぞれの側面から、文の実体 (entité) に迫ることが可能であるとみられるが、バイイの文論は、基本的には、言語作用的な主体表示作用の側面から文の実体に迫ろうとした文論の一つの試みとして位置づけられるものであろう。

また、言語表現的な表現調整作用の側面から文の実体に迫ろうとする試みが、言語体系 (langue) の一環をなすものとしての構文論 (syntaxe) の分野にかかわる諸研究を形成することになるとと思われる。さらに、対象・事態的な対象指示作用の側面から文の実体に迫ろうとする試みが、文の意味にかかわる文論の諸研究を形成することになるとみられるのである。

その文の意味に関連して、バンヴェニスト⁽⁴⁾ (É. Benveniste) が、次のように述べていることも印象的である。

記号論的記号は、それ自体として存在し、言語体系の実在体を形造る。しかし、それは、特定の適用をになうものではない。これに対して、意味論的表現である文は、特定のものでしかない。記号によって、人は言語体系の内的実在体に到達するが、文によって、人は言語体系の外の事物に結びつけられることになる。記号が構成的部分としてそれに固有な所記をもつものに対して、文の意味は、言語表現の場面への指示と発言者の態度を含むことになるのである。

バンヴェニストはさらに、言語分析⁽⁵⁾のレベルに着眼する立場から、文について、それがより下位の単位である構成要素を自身に含みながら、より上位の単位の全体性の中へ自身を組み入れる (intégrer) 作用を果たすことができない特質を強調している。そして、それとの関連において、文の基本的特質として、その述辞性 (caractère predicatif) をあげている。

バンヴェニストにおけるこの述辞性の提言と、先の文の意味に際しての場面への指示性の指摘とは、どのように関係づけられることになるのであろうか。この問題に関しては、ドラクロア⁽⁶⁾ (H. Delacroix) が「言語活動」(parler) の規定の中で用いている「言辭的定式化あるいは言辭的表示」(formulation verbale) の用語法が示唆的であるように思われる。それが、既存の定式的わくを新しい場面の対象・事態に適用することによってそれを表示することとして説明されうるものとみられるからである。

さらに、カーディーナー⁽⁷⁾ (A. H. Cardiner) の場合で言えば、その文論の中で、文構成の中核的機能をになう基礎概念として「述辞化」(predication) を提示し、それについて「何かについて何かを言うこと」(saying something about something) として説明している点が想起される。

このような文の中核的機能としての関説性は、文の外示的形態と内示的形態の別を問わ

ず、文の基本的構造としての「主辞＝述辞構造」を要求することになるであろう。バンヴェニストの提言した文の述辞性に際しても、そのような文の基本的構造としての深い意味の主辞＝述辞構造が、それと表裏の関係の場所に位置づけられうるとみられるのである。

バイイの文論が、基本的に、言語作用的な主体表示作用の側面からの文論でありながら、言語表現の形態的領域における問題解明への指向性を強くもっていたのと同じように、バンヴェニストやガーディナーの文論が、基本的に、対象・事態的な対象指示作用の側面からのものでありながら、バイイの場合と同じく言語表現の形態的領域における問題解明への高い指向性を示していることには、関心をひかれる。このようなところにも、一般言語学的な文論の共通の特徴点が見いだされうるように思われるのである。

文をめぐるの国語教育への展望の中で、まず基本的方向として、学習者が文をゆたかに表現したり解釈したりすることができるような充実した場を、指導者ができるかぎり多く設定してゆくことの重要性が指摘されるであろう。

さらに、それに関連して、第一に、バンヴェニストが示唆しているように、文の構成的分析的面への認識を学習者が深めてゆくことができるように、指導者が工夫してゆくことの重要性、第二に、文の現実場面での機能性、有効性を学習者が感覚的に把握してゆくことができるように、指導者が配慮してゆくことの重要性があげられるであろう。

注

- 1) Ch. Bally, *Linguistique générale et linguistique française*, A. Francke S. A. Berne, 1932, 1950². p.35. La phrase est la forme la plus simple possible de la communication d'une pensée.
- 2) Ch. Bally, *Linguistique générale et linguistique française*, p.36. La phrase explicite comprend [donc] deux parties : l'une est le corrélatif du procès qui constitue la représentation (p. ex. *la pluie, une guérison*) ; nous l'appellerons, à l'exemple des logiciens, le *dictum*. L'autre contient la pièce maîtresse de la phrase, celle sans laquelle il n'y a pas de phrase, à savoir l'expression de la modalité, corrélatrice à l'opération du sujet pensant. La modalité a pour expression logique et analytique un *verbe modal* (ex. *croire, se rejouir, souhaiter*), et son sujet, le *sujet modal* ; tous deux constituent le *modus*, complémentaire du dictum.
- 3) Ch. Bally, *Linguistique générale et linguistique française*, p.53. La pensée qu'on veut faire connaître est [……] le but, la fin de l'énoncé, ce qu'on se propose, en un mot : le *propos* ; on l'énonce à l'occasion d'une autre chose qui en forme la base, le substrat, le motif : c'est le *thème*.
- 4) É. Benveniste, *Problèmes de linguistique générale 2*, Gallimard, Paris, 1974. La forme et les sens dans le langage. p. 225. Le signe sémiotique existe en soi, fonde la réalité de la langue, mais il ne comporte pas d'applications particulières ; la phrase, expression du sémantisme, n'est que particulière. Avec le signe, on atteint la réalité intrinsèque de la langue ; avec la phrase, on est relié aux choses hors de la langue ; et tandis que le signe a pour partie constituante le signifié qui lui est inhérent, le sens de la phrase

implique référence à la situation de discours, et l'attitude du locuteur.

- 5) É. Benveniste, Problèmes de linguistique générale 1, Gallimard, Paris, 1966. Les niveaux de l'analyse linguistique. pp. 126-131.
- 6) H. Delacroix, Le langage (Nouveau traité de psychologie par G. Dumas, Tome cinquième, Félix alcan, Paris, 1936) p. 153.....3° Le parler ou la formulation verbale;.....
- 7) A. H. Gardiner, The Theory of Speech and Language, Oxford, 1932, 1951². p. 255.

補注 バイイ・小松英夫訳『一般言語学とフランス言語学』岩波書店, 昭和45年刊(注(1)~(3)の訳書)も参照した。

バンヴェニスト・岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』みすず書房, 昭和58年刊(注(5)の訳書)も参照した。